

## 【時代の証言者】 共産党・不破哲三（11）／毛沢東の提案拒否、断絶

2010.11.16 朝刊 10 頁

ベトナム訪問を終えた私たちは北京に移り、1966年3月3日から4日間、中国共産党と会談を行いました。中国側団長は劉少奇党副主席（国家主席）で、鄧小平党総書記も加わりました。ソ連も含む国際統一戦線問題では一致しませんでした。「論点は歴史の判定を待とう」と、穏やかな確認で別れました。

「中ソは 50 年代後半以降、国際共産主義運動の路線を巡り対立し、武力衝突も起きた。日本共産党はソ連とは断絶していたが、中国との関係は保っていた」

その後に訪れた北朝鮮とは国際統一戦線問題で合意し、21日に北京に戻ると、中国側が「共同コミュニケを作りたい」と言うのです。周恩来党副主席（首相）が責任者とのことでした。

「一致点だけの簡潔なもの」という条件で、会談が始まりました。中国側はソ連を共同で非難するよう求めました。これでは国際統一戦線を求める私たちの立場がなくなります。「我々は、我々の立場と事情でソ連と論争している」と主張し、一致する範囲内でコミュニケを作り、周恩来との会談で公式に確認しました。

ところが、「上海にいる毛沢東主席に会ってくれ」との要請に応じて 28 日に行くと、話が違いました。毛沢東はコミュニケを「軟弱だ」と否定したうえ、「北京の連中も軟弱だ」と自分の党指導部も批判しました。修正案にはソ連批判がみっちり書き込まれています。

会談後の昼食会は穏やかなものでしたが、翌日、修正案を正式に拒否すると、状況は激変しました。毛沢東は「これ以上話すことはない」と会談を打ち切り、「コミュニケも自分との会談もなかったことにしよう」が最後の言葉でした。



1966年、北京で行われた日中共産党会談の参加者（前列左から3人目が鄧総書記、4人目が宮本・日本側団長、その右が劉・中国側団長、2列目左から3人目が不破さん）

中国政治の日誌と突き合わせてみると、会談は「文化大革命」の嵐が起こる時点に当たりました。国内的には「軟弱な北京指導部」の打倒、対外的には、自主独立の立場で毛提案を拒否した我々への攻撃。毛沢東の言動には、文革の方向性がすでに現れていました。

「文化大革命は毛主席が発動した政治運動。「資本主義の道を歩む実権派」と批判された劉少奇副主席らが軒並み失脚した。毛主席が日本共産党を米ソなどと並ぶ「四つの敵」と名指ししたことなどで、中国との関係は断絶した。日本共産党では毛主席を支持する「中国派」の除名、脱党が相次いだ」

広東に数日滞在し、報告の準備をしました。宮本顕治団長の表情には複雑な思いが浮かび、私たちも対中関係が大変になると予想しました。実際に起こった事態は予想を超えており、中国の干渉と攻撃はソ連を上回る激しさでした。

「50年問題を経て、日本の問題に外国の党の干渉は許さない「自主独立」路線を決めても、血となり肉となるには一定の期間と闘争が必要でした。しかし、中ソとの闘争を通じて、全党は鍛えられました。若者が大量に入党し、党が前進する時期となりました。嵐に鍛えられるという感じでした。

(政治部鳥山忠志)

### **[時代の証言者] 共産党・不破哲三 (12) / 下町の選挙演説で苦勞**

2010.11.17 朝刊 13頁

「次の参院選に出てもらおうつもりだ」

宮本顕治書記長がいきなり、国政選挙出馬の話を持ち出しました。1968年8月、宮本さんが団長を務めた党代表団の一員として2度目の北朝鮮訪問中、平壤の迎賓館で庭を散歩していた時のことです。

国会議員になるのは、私の職業革命家の概念になかったこと。えらいお鉢が回ってきたと感じました。それでも、参院選は7月に終わったばかりで、3年先の話とっていたが、帰国すると、次の衆院選に当時の東京6区(定数4)から出ることが決まりました。選挙区は墨田、江東、荒川区。67年衆院選で共産党候補は落選していました。

生まれも育ちも東京ですが、隅田川の向こうに渡った記憶は子供の頃の花見など2回ほどしかない。地域の人たちとも、全くつながりがありません。そこで未経験の候補者活動

をするんだから、どんなことになるのかと不安を抱きました。

最初の演説会は小学校の体育館。「こんなに広いところでやるのか」と入ると、奥に紅白の幕が張ってあり、20人ほどの聴衆がいるだけ。それが初舞台です。

車もありませんから、支持してくれる商店から借りるんです。古い車には、ドアがなかったこともありました。当時の写真を見ると、路地の街頭演説で聴いているのは子供ばかりとか、人出の多い錦糸町駅前の演説では、足を止めている人が全くいないとか、そんな光景がいくらでもあります。下町行脚は1年以上続きました。半年ほどは東京西部のひばりが丘団地の自宅から通い、69年3月には家族で墨田区に引っ越しました。



1969年の衆院選に初出馬し、路地で支持を訴える不破さん

一番苦労したのは演説でした。論文は読み返してもらえますが、演説は耳ですぐ分かる論理でないと、聴衆がうなずいてくれません。文章を書く時も、演説で通用する「太い論理」を目指すようになりました。

宮本さんは、その時々私の演説をテープで聴いてくれて、「拍手が出てきた」などと、よく論評してもらいました。「笑いが出るようになったな」と言われたのは、本番が半年ほど後に迫った時期でした。

12月の衆院選では5万2860票、4位で何とか当選しました。東京6区では中選挙区制最後の93年衆院選まで、9回連続で当選しました。

《69年11月の沖縄返還合意の直後に行われた衆院選で、自民党は追加公認を含め300議席を獲得して大勝、社会党は90議席と惨敗した。共産党は、4議席から11議席に増やした》

初出馬の時から、墨田区の地蔵坂にある居酒屋のおばあちゃんが、選挙の度に群馬・高崎名物の大きなダルマを持ってきてくれました。93年の選挙前に亡くなっても、息子さんが「不破さんの選挙の時はダルマを持って行け」との遺言通り、しょってきてくれてね。今も家に残してあります。

そういう情の深さがありましたから、下町の選挙は面白かったし、政治家として鍛えら

れましたね。

(政治部 烏山忠志)

### [時代の証言者] 共産党・不破哲三 (13) / 40歳、まさかの書記局長に

2010.11.18 朝刊 13頁

衆院選で初当選した翌年の1970年7月に開かれた第11回党大会で、新設された書記局長に就任しました。書記局長人事は当時大きな関心事で、私の自宅まで夜討ち取材に来る新聞記者もいたほどです。

「69年衆院選で躍進した共産党は、党大会で「議長一書記長」体制から「議長一委員長一書記局長」体制に移行した。報道で取りざたされた書記局長候補に不破氏の名はなかった。不破氏は、委員長に就任した宮本顕治書記長の懐刀として「代々木のプリンス」と呼ばれていたが、40歳での就任は大抜てきだった」

何も知りませんでした。人事を発表する大会最終日の前夜遅く、宮本さんから「明日、提案するからな」と言われ、驚きました。私は労働組合から直接党本部に入り、政策委員会などで働いてきて、党組織を運営した経験がないのです。

「党全体を運営する仕事は無理です」と固辞しました。しかし、宮本さんは「そういうことは、明日の会議で言ってくれよ」と取り合ってくれません。

翌日の会議でも言いましたが、みんなに「足りないところは助けるよ」と推されて、逃げるわけにもいかず、結局引き受けました。国会議員候補になった時と同じく、断るのはなかなか難しいんですよ。

私の名前が発表された時、会場からワァーと驚きの声が上がりました。妻も、私が書記局長になるとは思ってもいません。そろそろ人事が決まったかなとテレビをつけたら、私の顔がいきなり出たのでびっくりした、って言っていました。

何で私に書記局長のポストが回ってきたのか。



共産党本部で記者会見をする宮本顕治委員長（右）と不破さん（1976年8月）

よく考えてみると、共産党の国会活動の比重が大きくなったことが、背景の一つにあったと思います。

私が党本部に入った64年頃は国会の議席が少なく、政党討論会にも声がかからなかった。報道機関も、共産党の記事は社会部が警察発表をもとに書くという時代でした。それが、60年代末には他党と同じ扱いを受けるようになり、私も党政治・外交政策委員長として討論会に参加しました。

書記長・幹事長討論会となると、宮本さんが出ました。宮本さんが参院議員になったのは77年ですから、この時期は国会に出ていなかった。でも、討論会の主題は大半が国会の問題なのです。その度に国会の動きを全部調べ上げ、頭に入れなければならない。国会の外にいて書記長の仕事をするの大変さを、よく承知していたんですね。

恐らく、宮本さんにすれば書記局長を国会議員から選ぶのは当然の前提だったんでしょうが、事前に名前が報じられたのは議員ではない党幹部でした。そうした前提に注意した人はいなかったんですね。

就任後は、10人くらいの書記局員が常時集まり、党務に当たる体制をつくりました。国会から選挙、党の組織活動まで党務全般を担当し、書記局長の仕事は「党にかかわる森羅万象」と言ったものでした。

(政治部 烏山忠志)

#### **【時代の証言者】共産党・不破哲三(14) / 予算委員会で初の論戦**

2010.11.20 朝刊 13頁

1969年の衆院選で共産党は11議席を獲得し、国会での質問時間も大幅に増えました。70年2月27日、衆院予算委員会での総括質疑(現在の基本的質疑)が、私の最初の国会論戦となりました。持ち時間はたしか、1時間38分でした。

《この質疑で新人議員が質問に立つケースは、現在でもそれほど多くはない。不破氏は初質問で、沖縄返還に関する69年の日米共同声明と、共産党が批判していた「言論出版妨害問題」を取り上げた。評論家の藤原弘達氏が69年、公明党の支持母体の創価学会に批判的な著書を刊行した。この出版妨害をめぐる問題は、公明党が70年に「政教分離」を宣言するきっかけの一つにもなった》

出版妨害は野党の公明党にかかわることなので、政府への質問としてどんな角度から取り上げるかは、なかなかの難問でした。

先輩議員に聞いても、名案は出てこない。共産党が衆院で二けたの議席を得たのは49年以來のことです。私が当選する前、質問時間は5分とか10分でした。こうなったら、自分で考えるしかありません。私の出番は総括質疑の最終日でした。初日から委員会に詰め切りで各党の質疑をずっと聞き、質問の仕方を勉強しながら備えました。



衆院予算委員会で佐藤栄作首相（閣僚席前列右端）らに質問する不破さん（1971年11月）

佐藤栄作首相はこの問題で、答弁を全部自分で引き受けました。ほかの人が答弁に立ったのは、木村俊夫官房副長官に事実関係を質問した時と、高辻正己内閣法制局長官が憲法解釈について発言した時だけです。この問題は自分が責任を持って仕切る、という気迫が感じられ、それなりに感心しました。

72年衆院選で党の議席が増えてからは、総括質疑一番手の持ち時間は3時間と長くなりました。

通常国会の場合、予算委が始まるのは1月末頃です。私は、前年の12月に国会の秘書団の会議を開き、各分野で「これは大事だ」と思っている問題を報告してもらい、そこから目星をつけて質問を組み立てることにしていました。

78年2月の質問で取り上げた千葉県柏市の「ロランC基地」建設問題も、この会議で「千葉で基地反対運動が起きている」と聞いた話が基になりました。

《不破氏は国会論戦を通して、与野党の間で「論客」との評価を高めていった。ロランCは船舶などに電波で位置を知らせる施設。不破氏は「核戦争時に攻撃目標になりやすく、人口密集地に置くことは危険だ」と追及した。反対運動が高まる中、米軍は79年2月に予定地の返還を発表。跡地では現在、東大柏キャンパスなどが整備されている》

総括質疑では、大きなテーマだけでも五つか六つは取り上げます。政府の答弁に応じて質問を展開しなければなりませんから、必要な資料はテーマごとに大学ノートに張り付けて持ち込みます。一つのテーマのノートが何冊にもなり、十数冊のノートを質問席に持ち込んだこともありました。

(政治部 烏山忠志)

**【時代の証言者】 共産党・不破哲三 (15) / 歴代首相と白熱論議**

2010.11.22 朝刊 9頁

1970年代の首相たちには、共産党の質問でも大事だと思えば、真剣に耳を傾ける姿勢がありました。

質問していて一番面白かったのは、田中角栄氏です。官僚を通さず、自分で仕切る実力を感じさせました。74年の「分析化研事件」でも、事態の深刻さを官僚よりもよく理解し、迅速に対応したと思います。

《不破氏は74年1月の国会質問で、科学技術庁が米原子力潜水艦寄港地などの放射能調査を委託していた財団法人「日本分析化学研究所」によるデータ捏造(ねつぞう)の事実を暴いた》

これは、分析化研が業務停止となり、新しい分析佐制ができるまで結果的に183日間原潜入港がストップする大問題となりました。当時は米国側の反応はあまり表に出なかったのですが、数年前、米政府と在日米大使館の往復電報などが公開され、米国のいら立ちぶりがよく分かりました。

この中には、キッシンジャー国務長官が、原潜が入港できない渦状について、「日米安全保障条約の重要部分の事実上の廃棄に相当する」と断じ、日本政府に「迅速かつ効果的に是正」を要求せよ、と大使館に迫る指示電報もありました。

イタリアなど欧州にも原潜入港反対の動きが起こった時は、「日米2国間の安保関係を超えた問題を生み出す」重大事態であることを日本側に認識させよ、という電報が続きました。



国内の関心は分析体制の確立にありましたが、米国にとっては世界戦略にかかわる衝撃

だったんですね。

この時取り上げた「物価Gメン」問題への対応も、角栄氏らしいものでした。

《73年に起きた第4次中東戦争後の石油ショックで、物価の高騰が社会問題化した。田中内閣は、売り惜しみなどを取り締まる「価格調査官（物価Gメン）」を任命していた》

関係省庁職員の兼任でした。当人に会ったり、電話したりして調べると、「名前だけで何もしていない」と正直に言う。任命されたことを知らない人もいました。実情を話して追及すると、角栄首相はその場で検討を約束、翌日には閣議で専任のGメン設置を指示し、1週間以内に75人を任命する素早さでした。

福田赳夫さん、大平正芳さんの時は、大企業の工場の労働実態を論戦の主題にしました。2人とも驚いたようで、大平さんは後で顔を合わせた時、「あれは本当にあることですか」と真顔で聞いてきましたよ。

三木武夫さんは「田中金権政治」のアンチテーゼで出てきたし、自民党でもリベラル派とされていたので、新しい政治姿勢を期待し、公害や環境、企業献金などの問題を取り上げました。しかし、当たり障りのない範囲で答弁し、三木さんらしさは少しも感じられませんでした。

でも、70年代の首相たちは質問後も私のところにきて、「今日はや一られた」「あの質問は良かった」と感想を言い合ったものです。最近の国会に、そうした雰囲気は感じられませんね。

(政治部 烏山忠志)